

Ⅱサムエル 11 章「主のみこころを損なった」

私たちが罪を犯してしまうのはどんな時でしょうか。気が緩んでいる時、誘惑に対して目を留め続けている時、人に自分を良く見せたい時、自分の思い通りにいかない時などが挙げられるでしょうか。

ダビデはイスラエルの神、主に信頼し、主に従っていました。主は彼と共にいてくださり、祝福してくださいました。けれども、順風満帆と思えるような中で、ダビデは人生最大の罪を犯してしまいます。

1. ダビデの罪（：1～5）

10 章からアンモン人との戦いの記述が続いていますが、その中でダビデの罪と主の取り扱いを伝えています。ダビデは再びヨアブとイスラエル全軍をアンモン人との戦いに送り出しました。その都ラバを包囲していました。「しかし、ダビデはエルサレムにとどまっていた」とわざわざ記しています。イスラエルの軍勢とダビデを対比し、その違いに焦点を当てています。敵との戦いのために力を尽くしているヨアブと家来たちに対して、ダビデはエルサレムでくつろいでいました。

2 節。夕暮れ時に床から起き上がるというのですから、何の緊張感もない状態です。そんな中で心に隙ができたのでしょうか。ダビデが王宮の屋上を歩いて町を見下ろしていると、一人の女性がからだを洗っている様子が見えました。4 節に「彼女は月のものの汚れから身を聖別していた」とあるように、きよめの儀式としてからだを洗っていたのです。

たまたま目に入った光景ですので、すぐに目を背け、その場から離れれば良かったでしょう。ところが、ダビデはその女性に目を留め続けます。その女性は「非常に美しかった」とあります。そして、ダビデは執着してしまい、その女性について調べさせます。すると、その女性はヒッタイト人ウリヤの妻、バテ・シェバであると分かります。家来の妻であることが分かったのですから、そこで止めれば良かったのですが、ダビデは使いの者を送って、彼女を王宮に召し入れます。そして、ダビデは彼女と寝たとあります。欲望のままに目的を果たしてしまったのです。ダビデは姦淫の罪を犯しました。モーセの十戒の第七戒を破りました。それだけでなく、第十戒も破りました。貪りの罪を犯しました。

このように誘惑に遭い、罪を犯してしまう罪人の姿は時代が変わっても変わりません。誘惑は人が注意を怠り、油断している時にやって来て、人を捕らえます。誘惑されたことを言い訳にすることはできません。「人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです」（ヤコブ 1:14）。

また、人は自分が犯した罪を重大なことと考えるかもしれません。しかし、罪の結果は重大なものです。バテ・シェバは家に帰り、ダビデはこのことはもう終わったと思ったかもしれません。ところが、バテ・シェバは身ごもり、そのことをダビデに伝えました。彼女はダビデのところに行く前に月のものの汚れから身を聖別していたのですから、妊娠は夫ウリヤによるものではありません。

2. 罪を重ねる（：6～17）

ダビデはバテ・シェバが妊娠したことを聞いて慌てました。妊娠が夫ウリヤによるものであるかのように見せかけ、自分の罪を隠そうとします。戦場にいるヨアブに人を遣わし、部下のウリヤを自分のもとに來させます。ウリヤがやって来ると、ダビデはヨアブや兵たちの安否を問い、戦いの様子を尋ねました。そして、家に帰るようと言います。

ところが、ウリヤは王宮から出て行くと、王宮の門のあたりで、王の家来たちと一緒に眠り、家には帰りませんでした。その知らせを受けるとダビデは「なぜ、自分の家に帰らなかったのか」とウリヤに問います。ダビデの心には自分の計略通りにいかなかった焦りと怒りがあったことでしょう。それに対するウリヤの答えから彼の誠実さが分かります。11 節。ウリヤは戦場を離れても、戦場では兵士たちが野営して労苦していることを忘れることはなく、自分だけが家で休むことはできないと考えていました。立派な心がけと態度です。ダビデはウリヤのことばかり、神の箱に対する態度や戦場にいる兵士たちの労苦に心を向けることを思い出させられたのです。

それでもダビデは悔い改めようとせず、自分の計略通りにすることをあきらめません。「明日になったら、あ

なたを送り出そう」と言って、ウリヤを食事に招きます。「ダビデは彼を酔わせた」とあります。彼が酔って、気が緩み、家に帰るようと仕向けました。しかし、ウリヤはその夜も王の家来たちと一緒に寝て、自分の家には帰りませんでした。

ダビデの計略はうまくいきませんでした。するとダビデは次の計略を考え、実行します。14～15 節。なんとウリヤを戦死させるようとヨアブに命じるのです。そして、ウリヤは自分の殺害を命じる手紙をそうとは知らずに持って行き、戦場に戻ります。ダビデは、この忠実な兵士のいのちを奪ってでも、自分の罪を隠さなければならないという思いに支配されていました。

手紙を受け取ったヨアブはダビデの命令通りに行きます。疑問があったでしょうけれど、命令に従いました。16～17 節。こうしてダビデは十戒の第六戒の「殺してはならない」も破りました。王の立場を利用して、ヨアブに命令して、自分の罪に加担させました。ダビデは何重にも罪を重ねました。雪の積もった斜面を雪の塊が転がり落ちて、次第に大きくなっていくように、罪を重ね、周囲を巻き込み、大きな罪を犯してしまいました。

戦いの勝利が続く記述の中で、罪を重ねた姿が記述されているのは、このような現実から私たちに警告を与えようとしているからでしょう。ダビデのように最も成功した王でさえ、主の目に悪であることを行ってしまったのです。その最中であっては自分の状態に気づかず、自分で止めることができないのです。それが私たち罪人の状態です。

3. 主の目には（：18～27）

ヨアブは命令通りに行った結果をダビデに報告します。使者にダビデに報告するときの注意も語ります。

19～21 節。ダビデがヨアブに命じた内容は他の兵たちやこの使者も知らなかったでしょう。21 節で取り上げていることは士師記に記されている出来事です。そのような過去の教訓から学んでいないのかと指摘があるだろうということです。

その報告に対してもし王が怒ったなら、「あなたの家来、ヒッタイト人ウリヤも死にました」と言いなさいとヨアブは使者に命じます。指摘に対して、全く納得できる答えになっていません。使者はどうしてそのように答えるのか理解できなかったでしょう。けれども、ヨアブとダビデには通じることでした。

使者はダビデのところにきて、ヨアブの伝言を伝えました。その報告に対するダビデの答えはあっさりとしたものでした。25 節。無謀な攻撃をしたために兵たちを失ったことを責めることはなく、「このことに心を痛めるな」と言いました。ダビデは使者を通してヨアブを励ますことばを伝えさせました。こうしてダビデの計略通りになりました。

バテ・シェバは夫ウリヤの死の知らせを受け、悲しみ、喪に服します。その喪が明けると、ダビデはバテ・シェバを迎え、妻としました。そして、彼女は息子を産みました。こうしてダビデは自分の罪を隠し通せたと思ったことでしょう。事実を知っているのは、自分とバテ・シェバとヨアブだけ、バテ・シェバとヨアブも事のすべてを知っているわけではないので、この一件は落着いたと思ったことでしょう。

しかし、周囲の人々には分からなかったとしても、すべてをご存知の方がいます。27 節の最後に「しかし、ダビデが行ったことは主のみこころを損なった」とあります。

主のみこころを求め続けてきたダビデが、その反対のことをしてしまいました。このようなダビデのことを、私たちは決して他人事とすることはできません。このような罪人の態度は誰もが知るべきですし、自らのことを顧みる必要があります。

犯した罪を隠そうとしても、たとえ周囲の人々には分からないとしても、主はすべてをご存知であることをいつも思い起こす必要があります。誘惑を退け、罪を犯さないことは難しいことですが、誘惑を受けたときに、早い段階で、そこから離れることが大事であると教えられます。

ヤコブ 1 章 14～15 節。私たちは自分の弱い部分を知っています。その弱さに付け込んで来る誘惑に対して、打ち勝つためのみことばを覚えていましょう。そして、私たちの欲となることに対しても、主が与えてくださる良きものに目を向けているようにしましょう。